

ルルーシュのためなら死ねる

トマトじゃないんです

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人生とは究極、運が良いか悪いかでしかない。
そして私は——確実に後者の人間だ。

気付いた時には私は全裸の超絶美少女で
満足げな顔で死んでるシスターが1人、目の前に転がっていた。
「……いや、まて」

どうやら私はコードギアスの世界に迷い込んだらしい。
それもC・C.に憑依すると言うカタチで。

これ、考えうるかぎり最悪の転生だよな？

もう死にたい、でも死ねない。

あ、そうだ！ルルーシュに殺してもらおう！

というわけで——よろしく頼むよ、私だけの皇子様。

●初投稿の為至らぬ所もあるかと思いますがよろしくお願ひします。

●作中に原作にはないオリジナル設定が出てきます。

目次

STAGE	1	「魔女の寄る辺」	1
STAGE	2	「愚者」	9
STAGE	3	「諦観と決意」	18

STAGE 1 「魔女の寄る辺」

この世の理は平等ではない。

「理不尽」と言い換えても良い。

例えば「これだけは誰にも負けない」

という特技が君にあったとしよう。

そうだな、君が学生だったとしてクラスでは

その分野に限り、真実己が一番だ。

一生懸命努力して血反吐を吐いてまでそれに執心し

ゆえに自分が他者に劣ることなどありえない。

学校の一クラス、いやもしかしたら

学校全体でもその分野で君が一番かもしれない。

だが、だ。

年を経るごとに解ってしまふ。

「自分が特別ではない」ということを。

己が一番だと思っていた分野でさえ例外ではない。

なぜならそう、何事においても上には上が存在する。

自身が及びも付かない領域にまで簡単に至れる者。

それも大した苦労もせず片手間程度で。

その時君はどう思うだろうか。

己が血反吐を吐き地べたに這いつくばってまで極めた特技を

鼻歌交じりで超越してみせる人物を前にして

君は「理不尽だ」と思わずにいられるだろうか？

「人は平等だ」などということができるだろうか？

少なくとも私にはできない。

この世はいつだって理不尽で、人は平等じゃない。

究極、この世は「運が全て」だといって良い。

生まれつき美しい者、醜い者。

そして富める者、貧しい者。

さらに強い者、弱い者。

すべて己では決められず、だからこそその理不尽で不平等。

だから、そう。私が今これほど理不尽な目にあっているのも
全てはこの世の理によって定められた運命だと言えるのかもしれない。
ない。

「なんだ……これ」

意識はハッキリとしていた。

だからこそ今この現状が余計理解できない。

まず、私は裸だ。すっぽんぽんだ。

一糸まとわぬ姿、下着すら身につけていない。

だが誤解しないでほしい。私に露出性癖は無い。

しかし現実問題私は全裸だった。

後ろのステンドグラスから差し込む光が

私の魅惑的な肢体を薄暗い室内にぼう、と浮かび上がらせている。

己の視界に映るのは大きすぎず、そして小さすぎないジャストサイズの美乳。

滑らかでシミひとつない処女雪の様な手足。

そして手ですととサラサラとこぼれおちる緑色の長髪。

これが、「私」だと？

「……いや、まて」

あり得ない

誰だ？これは

まず「私」は何だ？ここはどこだ？

軽くパニックになりつつも現状を把握するため

薄暗い室内を見渡すと、ソレはすぐに見つかった。

「シスター？」

私の真正面には満足そうな顔で額に穴を穿たれ死んでいる女性の死体があった。

服装からシスターと思われるその女性はしかし、不思議と見覚えがあつて……。

——次の瞬間、私はすべてを理解した。

「コードギアス……」

そう、ここは「私」が好きだったアニメ作品

「コードギアス 反逆のルルーシュ」の世界なのだ。

そして私はその作品内において主人公ルルーシュに異能の力

「ギアス」を与えた契約の魔女にしてヒロインの1人、「C・C」なのだ。

——つい先ほど同じ言葉をつぶやいた気がするが、言わせてほしい。

「……いや、まて」

ありえないでしょ、常識的に考えて……。

その後は端的に言って地獄だった。

原作のアニメ作品を知ってるからと言って

それは||コードギアスの全てを知っているというわけでは決して

ない。

特にC・C・に関して言えばその人生の大半が謎に包まれている。ルルーシュとエリアー1で出会うまでの彼女の動向はほぼ謎。

ギアスシリーズをアニメだけしか知らない「私」にとって彼女はマリアンヌやらシャルルと仲が良かったとか。

V・V・とはあまり仲良くなさそうだ、とか。

中華連邦でマオと暮らしてたけど捨てた、とか。

ギアス嚮団とかいう謎のカルト集団の長をやってたとか、大まかな知識しかない。

そしてそれらが何年、何月までの期間そうであり

どういった経緯でそうなったのかは全く分からないし

そもそも設定してあったのかも今となつては本当に謎である。

だがまあ、謎といえば「私」が一番の謎だ。

己の事なのに何もわからないのかと思われるかもしれないが本当に何一つわかる事が無いのだから仕方がない。

唯一分かっている事と云えば、前世（便宜上そう呼ぶ）において

「私」は日本に住む唯の一般人であり、それなりにアニメやら

サブカルチャーに通じていただけの人間だった、と言う事だけ。

それ以外の記憶についてはひどく曖昧だ。

なにせ「私」本来の性別がどちらだったのかすら分からないのだから。

だがまあ、それは別に良い。いや、よくはないが

差し当たって問題ではなかった。

というかそんな事を考えてる余裕はなかったしどれだけ記憶を遡っても思いたせない部分に関しては仕方ない。

人生諦めが肝心だ。

まさに裸一貫異世界に放り込まれた上に

記憶もおぼろげで元の世界に戻る方法も分からない。

さらにこの身は不老不死、とくればこの世界で生きていく以外の選

択肢が無いのだ。

だが不幸中の幸いと言うべきかこの世界の常識は全てこの体が覚えていた。

言語や宗教、その他もろもろまるで始めから知っていたかのように知識として私の中に有ったのだ。

これについて明確な答えは今になっても不明なままだが恐らくは「コード」が関係しているのではないかと思う。

C・C・やV・V・を不老不死たらしめている「コード」。

これによつてシャルルらが「神」と呼ぶ「集合無意識」とつながりが強い

私たちコード保持者はある程度、それに干渉できる能力を持っている。

いわば人類が誕生してからこれまでの知の集積体であるそれから私が必要としている情報をコードを通じて無意識的に手に入れたのだろう。

つまり「私」が成り替わる前のC・C・がこの世界で蓄えた常識と知識を。

この時なぜ「C・C・の記憶」がインストールされなかったのかは不明だが

無意識の領域で「私」が拒んでいたのかもしれないし

「私」というイレギュラーが集合無意識にあつたであろうC・C・の記憶項目を上書きしてしまったのかもしれない。

まあどちらにせよただの推測にすぎず答えは依然不明のままだ。

突然この器に宿つただけの凡人がコードやギアスなどといった超常の力を理解できるはずもない。

この件について私は考えるのをやめた。

さて、集合無意識にある膨大なデータにアクセスできると言うのならそれを利用して元の世界に帰る手立てなり自分の知能を上昇させるなりできるはずだろ

と思われるかもしれないが結論からいって、それは不可能だ。

そもそも無限の情報体である集合無意識から

自分以外の他者の知識を正確に抽出し取り込むなど不可能だと言えるだろう。

ただ例外として自身が契約を結んだギアスユーザーの知識や記憶ならば恐らくは……といったところだ。

勿論、やろうと思えばできないこともない。

ただそれは「アーカーシャの剣」のような大がかりな古代の遺物が必要だと思われる。

つまりコードも万能ではないと言う事でそれはそのまま

「私」のC・C.としての人生難易度が鬼レベルで跳ね上がると言う事だ。

(というかコードよりギアスの方がこの状況では百倍頼りになる気がする。)

ぶっちゃけた話、私に原作開始まで待とうだなんて考えはなかった。

あまりにもお先真つ暗すぎて早く死にたかつたとさえ言える。

というか実際死のうとした。勿論コードが私を死なせないが。

そこでコードを持つ物を殺す事が出来る存在、つまりは

ギアスを極限まで極めたものを育てようとした。

しかし歴史の修正力だろうか、私が契約したやつらは皆ことごとく死んでいった。

惜しいところまで至った者はいたが、それだけだ。

私からコードを奪えないのであれば意味が無い。

そうして長い時間を無為に消費していくにあたり、私の精神は次第に消耗していった。

なにせ自分を自分たらしめる確固たる記憶もなく、寄る辺となる他者もない。

特に賢くもないのならば死なないだけの非力な女だ。

しかしその「死なない」という一点が他者を嫌悪させる最も大きな要因となる。

無実の罪で燃やされ、灰にされて死んだ事もあった。
下種な男に犯される寸前、自ら舌をかみちぎって死んだ事もあつた。

なんか知らんがギロチンで首を飛ばされ死んだ事もあつた。

——だが死ねない。

これで狂うなという方が無理な話だ。

とつくに私の精神は限界を越えていたのだ。

いつまでも終わらない死と再生の連鎖。

親しいものはみな私を置いて先に逝く。

前世の記憶もほとんど無くC・C・Cがコードを得るまでの記憶も無い。

個としての質量が足りない空っぽでがらんどうのこの器に

不老不死という特性はただひたすらに魂を劣化させる地獄でしかなかった。

「死にたい」

それだけがいつしか私の行動原理となっていた。

今だから分かるがC・C・Cは本当にすごい。

この圧倒的孤独と虚無の中生き抜いて見せたのだから。

アニメの最後はルルーシュにすら先立たれ、また独りに逆戻り。

ありえないだろ、なんだその精神の強さは。

私ではこの永遠に耐えられない。魂は既に悲鳴を上げている。

だから、ああ、はやく——私の生を終わらせてくれ。

だがそんなある日、私は気づいた。

ルルーシュだ、ルルーシュがいるじゃないか——と。

この世界がコードギアスの世界だと言うのなら
彼が私を殺すことができるレベルに至れるのはほぼ確実だ。
ならば彼の生誕をまてばいい。そうだ、それがいい。

「私」のおぼろげな前世の記憶では「私」は彼が

コードギアスのキャラクターの中で一番好きだった。

そう考えると最早私の思考は止まらなかつた。

まるでアイドルに会える時をまちわびる少女のように胸が高まる。

あれだけ前世で好きだった存在に生身で会えるのだ。

こんなうれしい事はないじゃないか。

しかも十数年たてば私を「殺してくれる」。

個としての質量が限りなく薄く、長い時の中で疲弊し摩耗した私に
とって

ルルーシュと言う存在はまさに地獄に下ろされた蜘蛛の糸。

寄る辺なき私には彼こそが救世主に思えた。

終わらない地獄から私を解放してくれる、救世主に。

ああ——まさに、私だけの皇子様——！

そして「私」がC・C. となってから

数え切れないほどの時がたち——ついに

彼が、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアがこの世界に産声を上げた。

STAGE 2 「愚者」

「C・C. のあんな顔、初めてみたわ」

隅々まで手入れの行き届いたアリエス宮で

2人だけのお茶会を楽しんでいると

マリアンヌが突然、そんな事を言い出した。

一瞬何をいつているのかわからなかったが

すぐに「あの事か」と答えに辿りついた私は

気恥ずかしさを隠すように空のティーカップで口元を覆った。

マリアンヌはそんな私の様子が可笑しいのか

帝国皇妃にふさわしい上品さで微笑んだ。

——軍人をやっていたころはもつと豪快に笑うやつだったのにな。

などと、私はテーブルの向かい側に座る「友人」に

心の中で憎まれ愚痴を叩くも

同時にひどく穏やかな気持ちでいる事に気付いて

訳もなく涙が出そうになった。

裸一貫この世界に投げ出されてから

すでに数え切れないほどの時が経過した。

一時は発狂寸前までいった私の精神も今では一応の平穏を取り戻している。

何故なら希望のない私の今生において唯一とっていいソレを見出したからだ。

「ルルーシュ」という希望を。

私の無限に続く地獄を終わらせることができる救世主。

私だけの皇子様——彼を私は自身の寄る辺と見出した。

本人にとつて見れば恐らく迷惑この上ない話だろうが

しかしそうでもしないと私は今頃壊れてしまっていただろう。

いやもしかしたら、すでに壊れているのかもしれない。

あの時まだ生まれていもいなかった少年に

私の背負う、不老不死と言う呪いを背負わせると決めたのだから。
——そこまで考えて無理やり思考を打ち切る。
ずいぶんと前に決めた事だ。

今さら罪悪感など抱いたところで止まる気などない。
ならば無駄な悔恨などするべきではないはずだ。

ティーカップを口から離して私は先ほどの言葉に答えた。

「そうかな?」

「そうよ。だって貴女、何時もは全くの無表情なのに」

「ああ」

納得がいった、と言う風に頷いて

私はティーカップを受け皿ソーサーに置いた。

そういえば私はこの世界に転生してからこれまで

己の顔が何らかの感情に染まった様を見た事が無い。

内心どれだけ動揺していようと私の表情筋は

一切の仕事を放棄したかのように動かないのだ。

巷で一番と言われるお笑い芸人のライブを観に行った時も

本当は激しく爆笑しているはずなのだが

この体は笑い声一つ洩らさず無表情を貫いていた。

「私」という異物が中にいるせいかもしれない。

器と中身に齟齬がある為の歪みが表向きの感情の消失、なのだろうか。

芸人には悪い事をしたが決してつまらなかつたわけではない。

私自身非常に違和感はあるが私は確かに爆笑していた。

ただ、表情にそれが全く反映されないだけで。

ちなみに一緒に行ったマリアン又は笑いすぎて腹筋をつっていた。

「そんなに感動した?」

「命が誕生する場面に立ち会えたんだ、感動くらいはするさ」

「ふふ、そう? でも貴女がまさか泣くとは思わなかつたわ」

「……そうだな」

これは恥ずかしい。

先ほどはああいったがこういうときは非常に有りがたい。

本当なら顔を真っ赤にしてしまうところだが
全く顔に血が集まらないし見た目には相変わらずの無表情だ。

まあ、マリアンヌはある程度察しているのか
ニマニマとその美貌に笑みを浮かべてはいるが。

「それにしても、何年も前の事をよく覚えているものだ」

「それだけ衝撃的だったということよ。」

まあ確かに。

普段無表情で愛想のない鉄仮面が

いきなり号泣でもすればトラウマになるのもわかる。

しかし、それも仕方ないことだと私は反論したい。

ルルーシュを唯一の寄る辺と決めてから

マリアンヌやシャルルと出会うまで

これも、またものすごい時間を要したのだ。

その果てにやっと彼の存在を確認できた。

今でもあの瞬間の感動は忘れられない。

荒ぶる感情の波は心の防波堤をことごとく突き崩し

ついには鉄仮面の外装すら弾き飛ばして涙が瞳からあふれ出した。

声こそ挙げなかったものの、あの場で一番水分を消費したのは

まぎれもなく私だったと断言できるだろう。

さすがのシャルルもドン引きしていたことを覚えている。

私は奴のマカロニヘアーにドン引きだがな。

モーツアルトの何倍巻いてるんだよそれ。

いや、むしろバツハに近いか？——比較してみたが激しくどうでも

よかった。

「それは迷惑をかけたな」

「？　なんで？　少なくとも私は嬉しかったわ」

「？」

いきなりなにを言い出すかと思えば。

しかしマリアンヌだからな、いろいろ寛容なやつだから

マカロニヘアーの夫を「素敵！」なんていって受け入れる女だ。

無表情で滝の様な涙を流している女を目にしても

その程度は動揺するまでもないと言う事だろう。

さすがは女だてらに「閃光」の二つ名を戦場に轟かせるだけはある。

あのナイトオブワン、ビスマルクですらKMF戦では彼女に勝てない。

ギアスを発動してやつと五分の勝負だというのだから驚きだ。

「なるほど」

「何か行き違いが発生している気がするけど……まあ良いわ、それより良いの？」

「なんだ今度は。主語を抜いて話すな」

「だから、ルルーシユの件よ。ナナリーにだって貴女会っていないでしょう」

「そのことか」

そう、私はここ数年ルルーシユの前には一度も姿を現した事がない。

出生の場にこそ立ち会ったがそれきりだ。

それはナナリーに対しても同じスタンスでいる。

理由としてはやはり「原作」だ。

マリアンヌやシャルルとは交友関係のあったC・C。だが

ルルーシユとナナリーは彼女の存在を全く覚えていなかった。

つまりこの時点でC・C。と彼ら兄弟の間に面識は一切なかったというわけだ。

不老不死以外に取り柄のない私としては

未来を知っていると言うアドバンテージを出来るだけなくしたくない。

だからある程度の齟齬は見逃したとしても

基本的に原作の流れに逆らう気はないのだ。

だから、会わない。

できることならつかず離れず彼の息吹を感じたいところだが

今は我慢の時だ。なに、待つのは慣れた。

ならばあと十数年くらいは大したことはない。

まあこうして、たまにお茶会を開いてはマリアンヌから最近の兄弟の様子を写真付きで聞かせてもらったりはするけど。ああ、この写真なんて最高だ。

おてんばなナナリーに手を焼かされつつもまんざらでもない笑顔を浮かべるルルーシユ。

カワイイ。超カワイイ。まさに魔性だ。

私は「魔女」なんてよばれているがむしろ

お前にこそ、その称号はふさわしいよルルーシユ。

——おっと、彼は「魔王」だったか。

「まあこちらにも色々あるんだよ」

「ふくん？ まあいいけど」

私が適当にごまかすとマリアンヌはそれ以上の追及をやめて自分の残り少ない紅茶を飲み干した。

その姿は実に優雅で隙が無い。

ルルーシユがマザコンになるのも仕方ないと思えた。

……それにしても改めて向かいあつて分かることだが

ルルーシユはマリアンヌによく似ていると思う。

ブリタニア人にしては珍しい艶やかな黒髪に

アメシストを思わせる深い紫色の瞳。

元は庶民の出とは言うがその美しい容姿は私がこの世界で出会った

どの貴族よりも高貴な色香を漂わせている。

成程、これほどの美女ならばシャルルが惚れるのも当然というものの。

そしてそれを受け継いだルルーシユが美しいのも必然だ。

——などと私の思考がルルーシユで染まりかけたその時

図ったかのようにマリアンヌの口から彼の話題が飛び出した。

「ああ、そういえばルルーシユの訓練だけど、最近ものになってきたわ」

「……そうか、やはり私の見立ては正しかったな」

「ええ、私としても嬉しいし息子に自分の技を教えるのは中々楽しい

わ

「閃光のお墨付きとは……。さすが、血は争えないな。体術の方は――」

「ああ、ビスマルクに頼んだわ。ルルーシユは、嫌がってるけどね」
クスクスと鳥がさえずるように笑ってマリアンヌはいう。

原作の流れを変えないように、と言っておきながら

一部にはちやっかり介入していたりするのはどういうわけか。
それにもちやんと理由がある。

前世観た筈のアニメ「コードギアス 反逆のルルーシユ」を
思い出すに当たり、やはりルルーシユの最大の弱点は
その体力のなさとかMFの操縦技術だと思うのだ。

後者は一般兵程度には操れるもののEーS級相手には歯が立たず
前者に至っては女子にも劣る体たらくだ。

まあそこも私としては愛しい所ではあるのだが

ここはアニメの中ではない、少なくとも私にとっては現実なのだ。
で、あるならば何らかのイレギュラーが生じて

うっかりスザク辺りに殺される可能性だってある。

実際、アニメでは幾度も危ない場面があった。

「もしも」を考えればきりが無いが

打てる手はすべて打っておきたいと思うのが人情だ。

最大のイレギュラーである「私」がいう事ではないが
突発的なそれでルルーシユを奪われるわけにはいかない。

というわけで彼の成長報告を聞きながらもそれとなく
マリアンヌや場合によってはシャルルを巻き込んで

私なりのルルーシユ強化プランを話してみた。
シャルルはあまり気乗りしないようだったが

マリアンヌには思う所があつたらしくこれに賛同してくれて
今では毎日ルルーシユを鍛えてくれている。

経過を聴く限り順調に才能を伸ばしているようだなによりだ。

アニメではその頭脳だけが取り柄のように描かれる事もあつたが
ルルーシユはその実パイロットとしての適性は高い方だろう。

全く実戦を経験していないにも関わらずサザーランドも動かせるし

何気にランスロットのクルクルキックを防御している。

体力の面に関して、彼に意欲が無かっただけで

運動センス自体は非常に光るものがあると思う。

なぜならシンジユク事変の際、ルルーシュをテロリストだと誤認した

スザクの生身クルクルキックをしっかりと防いでいるのだから。

常人に初見で、それも視界の悪い地下であれを防御するのは不可能だろう。

なんせスザクはギアス世界屈指の人外キャラだ。

ただ死なないだけの私などよりよっぽど恐ろしい。

それをしっかりとガードしている時点で反射神経は非常に優れていると言っている。

原作の彼が最後まで体力が無くてKMFの操縦がイマイチなのも

ただ本人に運動への関心がほぼほぼ皆無だった事と

優秀すぎる頭脳で他をカバーできてしまったためだろう。

さらにゼロとなつてからは二重生活で多忙を極め

そつち方面の才能を伸ばす機会を失っていたのだ。

ガウエインは基本C・C。まかせでハドロンだし

蜃気楼は絶対防御が主で碌に戦闘していない。

だからこそ、ここで私の未来知識が役に立つ。

幼少の頃から体と操縦技術を鍛える習慣をもたせ

ブラックリベリオンに備えさせるのだ。

そうすれば将来スザクに勝てなくとも

善戦できる程度にKMFを操れるかもしれないし

体力だって少なくとも運動部に所属している女子程度にはつくはずだ。

KMFはマリアンヌに任せるとして体術の面を

誰に任せるかが問題だったが既にビスマルクに
教えて貰っているようなら安心だ。

なにせ生身では最強の男だ。マリアンヌやスザクでさえ
彼と真正面からやりあって勝てはしない。

「まあ、やつも忙しいから、いつもと言う訳にはいかないだろうが」
「そのときは私が体術の方も面倒みてるから大丈夫よ」
「ルルーシュに嫌われないようにな」

「あら、それを貴女が言うの？」

「ちがいない」

といつてもルルーシュは私の存在をまだ知らないわけだが。

しかしこの関係もあと少しで終わるだろう。

そろそろV・Vがマリアンヌを襲撃する時期だったはずだ。

——とはいえ私は彼女を殺させるつもりはない。

ここまできるとお前は本気で原作通りに進める気があるのか？と

この状況をみている第三者がいたのならツツコミを受けている所
だろう。

私の目的はあくまでルルーシュに殺されることだが

仮にも友人関係を築いてるマリアンヌを見殺しにするほど白状で
はない。

アニメの視聴経験から当初彼女への印象はあまり良い物ではな
かったが

実際に関係を構築してみればその精神が決して悪しきものでない
事は分かる。

ルルーシュとアーカーシャの剣で再開したマリアンヌがアレだっ
たのは

おそらく長い間精神体として存在していた事が原因なのだろう。

つまり物質的な執着が消えた事により今までの常識に価値を感じ
なくなったのだ。

そうして精神が変質しルルーシュが嫌悪するそれになった、と。

まあ推測でしかないがとりあえず私は彼女を殺させるつもりはな
い。

そのためにルルーシュが10歳になる少し前からはずっとここ、アリエス宮に（表向きはマリアンヌの警護として）住まわせてもらっている。

ルルーシュやナナリーと出くわさないようにするのは大変だがこれも友人と、私の皇子様の為と思えばなんでもない。

同じコード保持者であるV・V・が動けば私にそれが伝わるしいざとなれば身を呈してかばえばいい。

いつそV・V・の襲撃を伝えてしまおうかとも思ったが

シャルルの様子を見る限りこの時期の兄弟の信頼関係では

私がそれらしい事を云ったところで無駄だろう。証拠もないからな。

それにもしシャルルを怒らせでもして封印されたらたまらない。

というわけでマリアンヌ暗殺事件は私一人で何とかするしかないわけだ。

ままならないが仕方ない。まあ、上手くやってみせるさ。

——その数日後、アリエス宮にテロリストが侵入。

マリアンヌ皇妃が銃撃され、死亡した——。

STAGE 3 「諦観と決意」

コード保持者は『不老不死』。

この世のいかなる兵器、自然現象でさえその存在を完全に抹消することはできない。しかしそれは^{イコール}「殺せない、という訳ではない。およそ人がされれば死ぬであろう行為で容易く機能を停止する。勿論それは所詮仮初めの死にすぎないが一時的にしろ、コード保持者を殺す事は誰であつても可能なのだ。」

「終わった……」

己の身体より流れ出した血だまり。その上に倒れこんだまま、立ち上がれない。

既に傷はなく、いつものように蘇生されている。どこにも問題は無い——なのに、まるで四肢に力が入らなかった。

これほど自分が無力だと痛感させられたのはいつ以来だろう。

守ると誓った。その準備もしてきた……つもりだった。しかし「彼女」は死んだ。

謝罪の言葉を口にしようとして、やめる。その対象がいない言葉ほど、むなししいものはないから。

「マリアンヌ」

涙はでない。それは私が薄情だからか、それとも——



時間は一時間ほど巻き戻る——。

V・Vがアリエス宮に訪れた瞬間、それは私に伝わった。コード保持者は互いに存在を感知できる。さすがに国境を越えた先までは

不可能だが建物の中くらいならばどこにいても可能だ。

これから奴は原作通りにマリアンヌを殺すつもりだろうが、そうはいかない。彼女は私が守って見せる。

たとえ未来を変えてしまおうとも。

当たり前的事だが今後の歴史は大きく変化するだろう。

マリアンヌが死なないのならルルーシュ達が日本に捨てられる事もない。つまり『ゼロ』にならないし『黒の騎士団』も結成しないわけだ。

もしかしたらブリタニアへの反逆自体、考えもつかない可能性もある。

そうなると彼に私とギアスの契約を結ぶ理由がなくなる。結果私の望みが絶たれるかもしれないが——友人を見捨てることはできなかった。

確かに、ルルーシュに殺されることが現在の最も大きな望みではある。

だが、だからと言ってマリアンヌを己の欲の為に見殺しにすることはできない。

今に至るまでかなりの時間悩んだけれど私は問題を先送りにすることにした。

どうなるかはわからないがとりあえず今は己の心に従おう、と。

シャルルの事もある。最近のあいつはマリアンヌという、家族以外で初めてわかり会える存在を見出した事により「ラグナレクの接続」を見直す方向に心が変化している。

マリアンヌも現状ラグナレクには意欲的ではない。

そんな様がV・Vの目には裏切りに映ったのだろうか——

奴の葛藤など私はどうでもいい。ブラコンとは対話が成立しない。だから説得も不可能、とくれば今回の暗殺を防いだ後、シャルルにちくって封印してもらうしかないだろう。

下手にコードを奪ってギアス能力が復活しても厄介だ。

まあコードを奪って即殺す、という手段もあるにはあるがその手は

あまり使いたくない。

マリアンヌは殺させない。でも、できるなら最後はルルーシユに殺されたい。

改めて考えると矛盾だらけで笑えて来る。

そもそも、後者に至っては彼女を守り切った場合高確率で達成は不可能だろう。

我ながら愚かだがすべては終わってから考えよう。

そうして少しの緊張を胸に秘め、私は自室のドアをそつと開き——次の瞬間、銃弾の雨が私を撃ち抜いた。



「出来の悪い喜劇だ」

現実逃避の回想から意識を戻して、やつと力の入るようになった身体を起こすと目の前には見知った顔の「死体」が転がっていた。

その死体——私を殺したその人物はここ、アリエス宮で働くメイドだった。

おそらくは嚮団のギアスにより操られ私をハチの巣にしたあと、己の頭を撃ち抜いて自害したのだろう。

確かにV・Vの存在なら知覚できるがギアス能力者でもない上、ギアスにかけられただけの一般人の行動までは読み切れなかった。

私を先に殺しておく事にしていただけだ、奴は。

勿論不死である私は死なないが殺しつくすことで復元を遅らせ、足止めをすることはできる。

見事にそれは成功し、私はマリアンヌを救う事が出来なかった。

護衛と言う事で居候をしていた身だと云うのに、彼女を守るどころか盾になる事すら出来ずに虫食いだらけのチーズ状態でさつきまで死んでました、などと——なんて無様で滑稽な様なんだろう。

コード所有者は契約者の生死を知覚できる。

先ほど、マリアンヌをマリアンヌたらしめていた個体は生命活動を停止した。だが、彼女は完全に死んだわけではない。

精神と魂は肉体を脱し、ある一人の少女に取り憑いた。今後、マリアンヌだったものはその少女の中に巢食い精神を変質させていくことだろう。

そしてシャルルはラグナレクの接続へ本格的に動き出す。

——私はそれを止められる立場にありながら、何もできなかった。

「……」

涙は出なかった。友人が死んだにも関わらず、私の表情筋も涙腺も相変わらず仕事をしようとはしない。泣きたいほど悲しんでいるのに。

あるいは私は、彼女の事をそれほど大切に思っただけでなかったのかもしれない。

友だなんだと言っておきながら所詮は己が楽になる為に利用する駒の一つ程度と考えていたのだろうか。

それは違う、と心は訴えている。しかしそんな自分の心を最早信用できない。

長い時の流れの中、私はあらゆる事象に対して不感症を貫いてきた——それは一種の自己防衛でもあったのだが——そのために感情がマヒしてしまい、よほど強い想いでないと表層にまで表れることはない。

つまり今の私にとって友の死ですらそれに届かない……まさに^{ヒトデオン}魔女と呼ばれるに相応しい。

だがそんな人でなしで、度し難いほど愚かな私にも未だ強く心に抱くものがある——それこそがルルーシユへと求める、己の死だ。

一度は友のためにと忘却することも吝かではなかった望みだが……結局、その友を失ったことでより強く渴望することになったのは皮肉だろうか。

はじめは、殺してくれるならだれでもよかったのに、ルルーシユを

思い出したその瞬間に彼に囚われてしまったから、彼でないのだめなのだ。

実際、ルルーシユなら私を必ず殺してくれるまで育つ。

身の毛がよだつほど強いギアス適性。彼がいかに忌避しようとも一度契約してしまえばその力は必ず達成人へと至るだろう。

次こそは間違えない。私は死ぬために今を生きている。

そもそも、たった一つ以外は切り捨てるべきだった。ルルーシユに関する事以外は。

「ふん……」

自身の流した血と銃弾で服の役割を成さなくなったそれ——騎士服——を脱ぎ捨てる。

未だシャルルが混乱しているうちに支度を整えて国外へ飛ばなければならぬ。

時が来るまで、再びの流浪生活になるが……なに、いずれ来るその時を思えば苦ではない。

浴室に入り、シャワーの蛇口を目いっぱいひねる。

熱いその感覚を全身で感じながら、都合のいいことを考えてしまう。

熱湯により流れ落ちる血液のように「ここ」で得たすべての過去が流れ落ちてくれることを。